

1. 公開シンポジウム＆ワークショップ 「災害に強いコミュニティづくり」が開催されました

さる7月22日(土) 13:00～16:30、研究交流棟にて、公開シンポジウム＆ワークショップ「災害に強いコミュニティづくり」(主催:香川大学生涯学習教育研究センター、共催:香川県、後援:香川県教育委員会、高松市、高松市教育委員会)を実施しました。これは、『平成16年台風災害調査団報告書』の提言にもとづき、生涯学習教育研究センターの新規事業として企画したものです。



【パネリストの先生方(写真左から)】

長谷川修一工学部教授(安全システム建設工学)

室井研二教育学部助教授(都市社会学)

島津昌代臨床心理士(高松赤十字病院)

第1部では、まずはじめに、加野芳正センター長(当時)の挨拶の後、細末英正香川県防災局長から今年7月15日に公布・施行されたばかりの香川県防災対策基本条例についてご説明がありました。つづいて、学内外からお招きした3名の防災の専門家によるパネルディスカッションを行いました。

長谷川先生からは、「敵(=災害)を知り、己(=住居・職場等の災害リスク)を知る」ために、高松で発生した過去の災害と今後の対策のあり方について、多様な資料をもとにご説明頂きました。室井先生からは、他地域との比較として、2003年の九州水害、とりわけ太宰府市と飯塚市を例に、災害発生時の人の動きをコミュニティとの関係を交えてご発表頂きました。そして、島津先生からは、災害時の心のケアについて、中越地震の例なども挙げつつ、ストレスが発生する仕組みやストレス反応の諸相についてご報告頂きました。また、会場からは災害弱者対策と現在の個人情報保護法の矛盾を指摘する声が挙がるなどしました。



第2部は、「災害対策のために、今、考えなければならないこと」と題し、左の写真のように小グループに分かれ、パネリストも交えつつ、車座になってディスカッションを行いました。参加者には地域防災に関わっていらっしゃる方が多く、各グループともそれぞれの地域で抱えている問題などについて、活発な意見交換が見られました。参加者から「時間が足りない!」と指摘され、今後の反省としたいと思います。

なお、当日の様子は、NHKのニュースでも報道されました。(文責:山本珠美)



2.『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第11号のお知らせ

毎年発行している『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』は、生涯学習を研究する本学教員、センターが主催あるいは協力する講座等を担当した本学教員であれば、誰でも投稿することができます。最新号(第11号)の内容は以下のとおりです。ご関心のある方はセンター事務室までお問い合わせ下さい。なお、次号(第12号)の原稿募集につきましては、本年12月初旬に正式に通知いたします。

<シンポジウム>

2003年九州水害の社会学的研究(1)ー太宰府市における開発とコミュニティーー 室井研二(教育学部)

<研究論文>

- 高度情報社会における子育て支援の新しい試みとその検証(1)
ー携帯掲示板の中の母親のコミュニケーションから考えるー 清國祐二(センター)
- 生涯学習の推進を図るための参加型学習の方法論(1) 清國祐二(センター)
- 地域での遊びとプレーパークー栗林プレーパークの3年間の記録からー 清國祐二(センター)
- ベルギーにおけるパブリック・フォーラムの試み
ー論争的な科学・技術についての熟慮過程ー 山本珠美(センター)
- かがわ県民カレッジ研究・実践講座受講生アンケート調査報告
ー大学における社会人(成人)学習者の学びに関する一考察ー 山本珠美(センター)

3.新刊紹介

鈴木眞理・松岡廣路編著『社会教育の基礎』学文社、2006年8月

* * * * *

本書は、社会教育について初めて学ぶ人のために、その総体を包括的に理解してもらうためのテキストとして基本的には編集されています。それに加えて、近年の急激に変化する社会環境の中で、社会教育において視野に入れるべき新しい視点を若手研究者の感性で鋭く切り込んでいます。大学生のみならず、社会教育職員の研修にも活用できる良書に仕上がっています。

* * * * *



<センター専任教員の担当執筆章>

第7章「学習支援方法の諸相」(清國祐二)

キーワード:インセンティブ/モチベーション 共同学習 個人学習 集合学習 高度情報社会
情報リテラシー 遠隔教育 参加型学習/ワークショップ グループワーク ファシリテーター
体験学習/ボランティア学習

第11章「社会教育の国際的展開」(山本珠美)

キーワード:啓蒙主義 社会運動 識字 万人のための教育 ユネスコ 自己主導的学習 学習権
リカレント教育 多文化共生 持続可能な開発 NGO グローバリゼーション コミュニティ教育

センター雑感

今年の夏はワークショップに始まり、ワークショップで閉じた。ワークショップに関する共同研究を始めて足かけ4年、集大成の年というつもりで臨んだ。講座のダブルヘッダーは普通で、トリプルヘッダーもあった。振り返ってみて、疲れを感じさせなかったのは参加者の能動的な姿勢であった。ワークショップの主役が参加者であるのはいうまでもない。一方、私の役割はファシリテーターだ。ファシリテーターとは直訳すれば学習促進者であるが、学習者の相互作用により学習成果を高める触媒の役割が期待される。その役割に徹しきれていたかどうかは怪しいが、いくらかは自分自身の成長を実感できた。この世界に深く入り込むと怖さも感じる。「やったような気になる」勘違いである。学習は変容をともなって成長に結ぶ。パシリテーター、パクリテーター等いろんな造語が生まれているワークショップの世界、こやつはかなり手強い。(清國)